

## 博士課程教育リーディングプログラム現地視察報告書(平成27年度)

博士課程教育リーディングプログラム委員会

機関名	東京大学	整理番号	C02
プログラム名称	ライフイノベーションを先導するリーダー養成プログラム		
プログラム責任者	宮園 浩平	プログラム コーディネーター	岩坪 威
<p>1. 進捗状況概要</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>本プログラム（Graduate Program for Leaders in Life Innovation: GPLLI）の取組は全体としてまとまりのある充実したものになってきている。</li> <li>中間評価の指摘事項に対して真摯に対応しており、中間評価の段階から着実な進展が見られる。</li> <li>新たな取組も含め、多くの国際的なプログラムが積極的に実施されており、広い意味でのライフサイエンス関連分野においてグローバルに活躍するリーダーの養成が期待される。</li> </ul> <p>○学位プログラムについて</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「分野俯瞰講義」や「輪講」などを通して、医学・工学・薬学・理学の分野横断的な学生の交流が実践されている。</li> <li>学生間の情報交換から共同研究が始まった例や、異なる研究科の学生が自主的に英語の勉強会等を始めた例もあり、異分野交流の成果が挙げられていると見られる。</li> <li>共同研究については、学生からの申請に対し審査をした上で、予算の支援を行っている。</li> </ul> <p>○グローバルリーダーを養成する指導体制について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>学生の自主企画による数週間以内の海外短期研修制度、特任教員の企画による「議論力強化ワークショップ」（2週間程度）といずれも GPLLI の学生が海外に出て切磋琢磨する機会が新たに設けられ、学生にも大変好評である。</li> <li>同じく新たな試みとして、異分野の海外研究者に対し、学生が英語で研究発表を行い、アドバイスを受ける機会を設けている（Student Seminar）。</li> <li>リーダーとしての素養を醸成するために「リーダー論」の講義を実施している。GPLLI プログラムの成否の判断のためには、修了生の進路や様々な分野での活躍の様子を長期的に見る必要があるが、修了時のアンケートなどフォローアップの試みも行われている。</li> <li>上記に関連して、既に GPLLI からの修了生が出ており、産官学の各分野で活躍している。一部の修了生を講師として、後輩である現学生を対象としたセミナーを行い、様々なキャリアパスを提示する試みが始められている。</li> </ul> <p>○優秀な学生の獲得について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>現地視察時に意見交換を行った学生はいずれも非常に優秀であった。学生全体としても、平成 25 年度までで 4 割の GPLLI 学生が学振の特別研究員に合格するなど、優秀な学生の輩出に関する問題は認められない。</li> <li>ただし、多様性が重要な本プログラムにおいて、留学生および社会人の比率が当初の予測を大幅に下回っており、改善することが望ましい。</li> <li>医学・工学・薬学・理学の各専門分野の参画において、研究科における学生数のバ</li> </ul>			

ランスが取れていることが望ましいが、工学系の学生が極めて少ない。工学系で医療に関する研究室が多くなく、かつ複数のリーディングプログラムが競合するという大学の状況があるが、引き続き努力頂きたい。

○事業の定着・発展について

- ・ 全学として継続的に支援を行うため、平成 26 年度に、全研究科から選出された委員による「大学院教育検討会議」が設置され、ワーキンググループにおいて修士・博士一貫の学位プログラム制度が検討されている。
- ・ 平成 28 年度の立ち上げを目指す全学的な「国際卓越大学院」構想における、上記の修士・博士一貫の学位プログラム制度の中で、GPLLI の発展型として医工薬理分野横断型の博士課程大学院について検討されており、その実現が望まれる。

2. 意見（改善を要する点、実施した助言等）

- ・ 本プログラムが用意している長期（2 ヶ月）の海外留学やインターンシップについて、学生の中には「是非行きたいと思うが研究室からの許可が下りない」という話があった。無論、各自の専門分野の研究基盤がしっかりしている必要はあるが、グローバルなリーダーの養成にとっては、出来るだけ早い時期に海外経験を積むことも重要であるので、海外経験の重要性についても研究室と意識共有を図って頂きたい。
- ・ 上記のように GPLLI 学生が所属する研究室の指導教員の中には、依然として本プログラムに理解を示さない者がプログラム担当外の教員に相当数いるようである。2 週間程度の海外研修や病院実習を履修するために、学生が労力をかけて教員を説得している状況は、本プログラムの趣旨に反すると思われ、早急の改善が望まれる。本プログラムの趣旨をより多くの教員に周知するよう更に努力して頂きたい。
- ・ 副指導教員と学生との接点はあまり多くないように感じられた。GPLLI の学生の数が少なくないので教員の負担が大きくなることは理解するが、もう少し学生と教員の双方が積極的に交流することで、本プログラムの長所がさらに引き出せるのではないか。
- ・ 多様な背景を持つ学生の獲得という観点からも留学生や社会人経験者の本プログラムへの参加が少ないことも懸念される点である。留学生や社会人経験者について、制度上、経済的支援の対象とならない学生についても、GPLLI に参加する道を開くべきと思われる。
- ・ 新たに始まった「共同研究支援」は、経費の負担や成果の取扱い等、様々な課題が出てくるとは思うが、是非うまく運用して、異分野融合の実を挙げて頂きたい。